

保育者の表現活動の資質向上のために教養教育は何を提供できるか

智原江美

I. はじめに

保育現場での表現活動における実践力を高めるために、筆者は鍋島らと共にこれまでの保育者養成校の表現領域にかかわる授業科目をクロス（連携）させた学生の活動経験が重要となることを報告してきた。¹⁾ 保育現場で表現活動を指導し子ども達と楽しむ際には、養成校において従来の音楽・造形・身体・言語表現の単独の領域にとらわれない、様々な表現方法を経験したり、協力して総合的な表現作品を作り上げる経験をすることで、これまでの単独の表現領域のみの指導とは異なる保育が展開できるのではないかと考えられた。

これら一連の研究を進めるにあたり、幼稚園・保育園で表現活動を指導している保育者および幼稚園教諭・保育士養成課程を擁する大学・短期大学・専門学校の表現領域担当教員に「表現活動を指導する保育者の資質」として重要と思われる事柄について尋ねた。また、総合表現の授業を受講した本学短期大学部こども保育学科の2年生および大学こども教育学科2年生を対象に、授業終了時に同じ内容のアンケート調査を実施した。

本稿ではこの4者を対象としたアンケート調査結果を基に、表現活動を行う上で保育者として備えていることが望ましいと考えられる事柄について検討する。

II. 総合的な表現活動実施の際に必要な事柄についてのアンケート調査の実施

1. アンケート調査の実施

総合表現に関する資質について尋ねるための質問項目は、平成25年度4月に保育士養成協議会専門委員会が「全国保育士養成協議会専門委員会課題研究における保育士の専門性についての調査」²⁾において作成

した質問項目を参考に検討し、以下の6項目について「非常に需要」、「重要」、「どちらでもない」、「あまり重要でない」、「重要でない」の5段階で回答を得た。

- ① 身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性
- ② 身体・表現・造形・言語等の表現活動に関する技能
- ③ 身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力
- ④ 身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得
- ⑤ 保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術習得
- ⑥ 表現活動の観点から子どもの発達を捉え、具体的な表現活動に結び付けることのできる能力

上記の6項目の質問を含むアンケート調査を、平成26年10月には京都府南部の国公私立幼稚園・保育所計200か園を対象³⁾として、平成28年1月には全国の保育者養成課程を擁する大学・短期大学・専門学校計200校を対象⁴⁾として実施した。それぞれ回収率は34.5%、27.5%であった。

また、保育現場、養成校へのアンケートを基に総合表現の授業内容を表現領域担当教員4名で検討し、平成27年度後期には短期大学部こども保育学科2年生を対象⁵⁾として、平成28年後期には大学こども教育学科2年生を対象⁶⁾に総合表現の授業を開講した。これらの授業では従来の身体・音楽・造形・言葉の単独領域での科目としてではなく、授業内容は複数の領域を連携させた活動に取り組んだ。それぞれ受講生は63名、60名であり、幼稚園児を対象とした作品発表も含む全15回の授業終了後に同項目の調査を振り返り課題として記入させた。受講の時期については、短

期大学部こども保育学科学生は幼稚園免許・保育士資格を取得するためのすべての実習を終えた2年次後期の受講であり、大学こども教育学科学生のうち小学校教諭を目指す学生は1週間の幼稚園実習を終了後、保育者を目指す学生は1週間の幼稚園実習終了後、2週間の保育所実習を授業期間中にはさんでの2年次後期の受講であった。

データの扱いについては、4者を対象としたいずれのアンケートの回答結果も園名、校名、個人名がわかるような扱いをしないことで公表することの了解を得ている。

2. アンケート調査の結果

表現活動を指導する保育者の資質として重要な事柄として尋ねた6項目は、幼稚園・保育所、養成校、本学大学・短大の受講生を対象としたすべてにおいて、「非常に重要」もしくは「重要」と答えた回答が多く見られた(表1)。

幼稚園・保育園保育者からの回答では、「非常に重要」としてあがったものは「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」(58.0%)、「表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結び付けることのできる能力」(55.1%)であり、他の4項目について「非常に重要」と回答したのは5割以下であった。「重要」との回答は「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能」(63.8%)、「身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得」(50.7%)であり、技能や指導法の習得と言ったノウハウ的な事柄よりも感性や具体的な表現活動の展開に結び付ける能力などの実践力・総合力が重要ととらえられているといえる。

保育者養成校の表現領域担当教員からの回答では、「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能」以外のすべての項目では5割以上が「非常に重要である」と回答し、中でも「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」(78.2%)、「表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結び付けることのできる能力」(70.9%)はともに7割を超える教員が「非常に重要」と考えており、同様に技能習得のみに重きを置くのではなく、個々の感性を基本とした実践力・総合力を重要と考えていた。これについては保育者と養成校教員には同様の傾向がみ

られた。

学生を対象とした調査では、幼稚園免許・保育士資格取得のためのすべての実習を終え、就職を控えた短期大学部2年生の回答では、「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」(80.0%)、「表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結び付けることのできる能力」(73.3%)、「身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力」(71.7%)の項目について「非常に重要」との回答がみられた。

一方、1週間の幼稚園実習、2週間の保育所実習(学校教育コース学生は1週間の幼稚園実習のみ)を終えた大学2年生の回答は、「表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結び付けることのできる能力」(72.4%)が「非常に重要」と回答した中でも最も多く、次いで「保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術習得」(65.6%)、「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」(63.8%)があがり、他の3者を対象とした調査と「非常に重要」と考える項目が異なる結果となった。

次に、質問項目別に調査対象による差異についてみていく。

「① 身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」に関しては、4者とも重要とはとらえているものの、短大2年生(80.0%)、養成校教員(78.2%)、大学2年生(63.8%)の順に「非常に重要」と感じている回答が多く、保育者は(58.0%)最も低かった。

「② 身体・表現・造形・言語等の表現活動に関する技能」に関しては、調査を行った4者すべてにおいて「非常に重要」と答えた回答が「重要」を下回るか同数となり、技能習得だけでは実際の保育の展開にはつながらないと考えていることが伺える。

「③ 身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力」について「非常に重要」と回答したのは短大2年生が最も多く71.7%であったが、他の3者では5割前後が「非常に重要」と答えている。

「④ 身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得」については「非常に重要」、「重要」がすべての対象においてほぼ半数ずつであり、「どちらでもない」

表 1. 保育者が考える表現活動を指導する保育者の資質として必要な事柄 (n=69) %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	1.4	0	4.3	34.8	58.0	1.4
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	1.4	1.4	10.1	63.8	23.2	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	1.4	1.4	5.8	43.5	46.4	1.4
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	1.4	1.4	11.6	50.7	34.8	0
保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術指導	1.4	1.4	2.9	44.9	49.3	0
表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力	1.4	1.4	2.9	39.1	55.1	0

表 2. 養成校表現領域担当教員が考える表現活動を指導する保育者の資質として必要な事柄 (n=55) %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	0	0	1.8	20.0	78.2	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	0	0	0	69.1	30.9	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	0	0	0	49.1	50.9	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	0	0	0	47.3	52.7	0
保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術指導	0	0	0	45.5	54.5	0
表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力	0	0	0	29.1	70.9	0

表 3. 短期大学 2 年生が考える表現活動を指導する保育者の資質として必要な事柄 (n=60) %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	0	0	1.7	18.3	80.0	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	0	1.7	6.7	45.0	45.0	1.7
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	0	0	1.7	26.7	71.7	0
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	0	0	3.3	41.7	55.0	0
保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術指導	0	0	0	35.0	65.0	0
表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力	0	0	0	26.7	73.3	0

表 4. 大学 2 年生が考える表現活動を指導する保育者の資質として必要な事柄 (n=58) %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性	0	0	3.4	29.3	63.8	3.4
身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能	0	1.7	1.7	53.4	39.7	3.4
身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力	0	0	3.4	44.8	48.3	3.4
身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得	0	0	8.6	46.6	41.4	3.4
保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術指導	0	0	1.7	29.3	65.6	3.4
表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力	0	0	3.4	20.7	72.4	3.4

表 5. 身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	0	4.3	34.8	58.0	1.4
養成校教員	0	0	1.8	20.0	78.2	0
短大 2 年	0	0	1.7	18.3	80.0	0
大学 2 年	0	0	3.4	29.3	63.8	3.4

表 6. 身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	1.4	10.1	63.8	23.2	0
養成校教員	0	0	0	69.1	30.9	0
短大 2 年	0	1.7	6.7	45.0	45.0	1.7
大学 2 年	0	1.7	1.7	53.4	39.7	3.4

表 7. 身体・音楽・造形・言語等の表現活動にかかわる教材などを子どもの発達に合わせて作成・活用する能力：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	1.4	5.8	43.5	46.4	1.4
養成校教員	0	0	0	49.1	50.9	0
短大 2 年	0	0	1.7	26.7	71.7	0
大学 2 年	0	0	3.4	44.8	48.3	3.4

表 8. 身体・音楽・造形・言語等の表現活動の指導法の習得：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	1.4	11.6	50.7	34.8	0
養成校教員	0	0	0	47.3	52.7	0
短大 2 年	0	0	3.3	41.7	55.0	0
大学 2 年	0	0	8.6	46.6	41.4	3.4

表 9. 保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術の習得：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	1.4	2.9	44.9	49.3	0
養成校教員	0	0	0	45.5	54.5	0
短大2年	0	0	0	35.0	65.0	0
大学2年	0	0	1.7	29.3	65.6	3.4

表 10. 表現活動の観点から子どもの発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力：調査対象別の比較 %

	重要でない	あまり重要でない	どちらでもない	重要	非常に重要	回答なし
保育者	1.4	1.4	2.9	39.1	55.1	0
養成校教員	0	0	0	29.1	70.9	0
短大2年	0	0	0	26.7	73.3	0
大学2年	0	0	3.4	20.7	72.4	3.4

との回答も多の質問項目より多く見られた。

「⑤ 保育のねらいに即し、子どもの遊びを豊かに展開するための技術習得」に関しては、短大2年生(65.0%)、大学2年生(65.6%)が「非常に重要」と答えており、保育を学ぶ学生にとっては重要な課題ととらえていることがわかる。

「⑥ 表現活動の観点から子どもの発達を捉え、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力」は、養成校教員(70.9%)、短大2年生(73.3%)、大学2年生(72.4%)が「非常に重要」と答えたが、現場保育者で「非常に重要」ととらえる回答は55.1%であった。

Ⅲ. 考察

保育現場、養成校表現領域担当教員、短大2年生、大学2年生の4者を対象としたアンケート調査結果から次のようなことが明らかとなった。

「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する技能」については、重要な要素であると考えてはいるが、非常に重要とまでは考えていないことが4者の共通の捉え方であった。技能だけで保育が展開できるのではなく、子どもを主体とした保育を展開するには決して高度な技能が必要ではないと捉えている。

一方、技術・技能的な項目と比較して重要と考えられていたのは「身体・音楽・造形・言語等の表現活動に関する豊かな感性」や「表現活動の観点から子供の発達をとらえ、具体的な表現活動に結びつけることのできる能力」であり、4者ともが「非常に重要」とあ

げた。これらは理論や技能の学習によって習得できるものではなく、一人一人の成育過程での生活経験や社会的な経験、自然環境の中での活動経験などを通して習得できる非認知的な能力であると言える。重要なことは子どもの発達・興味・関心に即した活動を展開する能力とそれを可能にする技能となるであろう。

感性とは『大辞林(第3版)』によると「物事に感じる能力。感受性。感覚」とある。感性の育みや習得は養成課程の授業のみではその習得が完結できるものではないが、その方向付けはある程度可能であろう。技術・技能の指導などは具体的な到達目標が設定し易くカリキュラムとして明示しシラバスにも具体的記載がし易いが、感性の育成は具体的な表現が難しく教員と受講者との間の共通理解を持つことも難しいので、往々にして指導の中で軽視されがちな部分がある。“豊かな感性を育もう”のようなスローガンのな目標を掲げるだけでは教員も学生もどう取り組むのかがはっきりせず、それがどの程度習得されたかを客観的に評価する方法も無い。あまり具体的に規定しすぎるとかえって本質を損なう懸念はあるが、養成校の教育内容として実施するためにはできるだけ具体的な活動や到達基準を示せる形でのカリキュラム作成が課題であろう。

これまでの我々の試行錯誤としては、様々な養成課程の授業科目において可能な範囲で本物に触れさせる機会を提供するとともに、グループ活動における協調性や人と人との調整力、課題に対するの創意工夫することを経験出来るような共同作業を授業として展開

してきた。このような活動の中で学生たちは物事のいろいろなとらえ方・感じ方があり、また感じたことを表現する方法に様々な方法があること気づくことができる。また、これまで総合表現の授業を実施してきた中で、言葉を使用せずに事物を表現することの難しさを多くの学生が感じていた。これらのような取り組みをさらに発展させることが豊かな人間性を育て感性の育みにつながると考えられる。

表現領域における具体的活動においては、身近な素材を用いての様々な様式での表現を経験することが重要であり、感じたことを即興で表現するような経験が豊かな感性、表現力へと発展していくのではないだろうか。また、それらを発展させて、これまでの表現領域にとらわれるのではなく、表現領域を重複させたモチーフの活動の経験なども重要であると考えられる。学生同士の自由な発想に触れることで、他の学生も指導者も新たな視点・方法に気づく機会を得ることになるであろう。

また、保育者としての感性の習得ということから考えると子どもの前で演じる経験も重要である。そうすることで表現者としての自分を対象化してみることができ、自分の感性・表現力を確認する機会となる。そして子どもの反応を直接感じることでさらに豊かな表現力の習得が可能となるであろう。

IV. 課題と展望

豊かな感性は特定の教科で習得できるものではなく、また正解があるものではない。広い視野を持って個々が感じたように表現することが大切であり、また自分とは異なる表現の多様性をみとめ、自らも表現のバリエーションを増やしていけるようになることが保育者としての教養であり、養成校での課題となるのではないだろうか。

繰り返しになるが、感性は特定の教科で一定期間学んだから身に付くものではない。保育者を目指す学生への指導者の日々の働きかけや環境づくりによって育まれていくと考えられる。加えて指導者がいかに豊かな表現力を備えているかということも重要な要素と言える。自身の担当する身体表現系の授業では、動く体に興味を持ち、また動く身体・しなやかな身体を育成し、体を使って動くことの楽しさを味わえるような授

業を展開していくことが課題となるであろう。

豊かな感性をもっていることは保育者の資質として欠くことのできないものであろう。保育者の感性が子ども達の豊かな表現を引き出し、またそれらを受け止めることができる。それを保障するためには、技術習得に偏らないようにすることの重要性を述べてはきたが、同時にそれらを実現するための個々の基本となる技能も軽視してはならない。本稿でとりあげたような活動をカリキュラムの中で位置づけ、到達目標として学生にも意識し易い形に整理して行くことが今後の課題として重要であろう。

注

- 1) 筆者らは平成 26～28 年度に文部科学省科学研究費補助金(基盤研究 C)「保育者養成における領域『表現』へのクロスカリキュラム導入に関する研究(課題番号 26381297)」を得て、保育者養成校での表現領域の授業実践に関する研究に取り組んだ。研究代表者: 智原江美、共同研究者: 鍋島恵美・和田幸子・田中慈子・下口美帆。平成 29 年 3 月には本研究の研究成果報告書を発行。
- 2) 一般社団法人 全国保育士養成協議会専門委員会では平成 24 年度に「保育者の専門性についての調査—養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み—」に関する調査を実施、平成 25 年 9 月に発行した報告書による。
- 3) 1) の研究の一環として平成 26 年 10 月に「幼稚園・保育所における『表現』領域の活動に関する調査」を京都府南部国公立幼稚園・保育所 200 か園を対象に実施し、69 園より回答を得た。この調査結果についての報告は「京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要第 53 号 119-134 頁に掲載。
- 4) 1) の研究の一環として平成 28 年 1 月に「保育者養成校における『表現』領域の授業に関する調査」を全国国公立大学・短期大学・専門学校 200 校を対象に実施し、55 校より回答を得た。この調査結果についての報告は「京都光華女子大学・京都光華女子大学短期大学部研究紀要第 54 号 197-208 頁に掲載。
- 5) 京都光華女子大学短期大学部こども保育学科 2 年生を対象として平成 27 年後期に開講した「保育実践演習」では総合表現をテーマとして取り上げた。こ

の授業は鍋島恵美・和田幸子・田中慈子・智原江美の4教員が担当した。この科目での取り組みについては、「クロスカリキュラムを用いた保育内容『表現』の授業展開に関する試案」（保育士養成協議会第54回研究大会、平成27年9月、於：ホテルレイTON札幌）及び「クロスカリキュラムを用いた保育内容『表現』の授業開発」（日本保育学会第69回大会、於：東京学芸大学）においてポスター発表を行った。

- 6) 京都光華女子大学こども教育学部こども教育学科2年生を対象として、平成28年後期に「保育内容Ⅴ（総合表現Ⅰ）」及び「保育内容Ⅴ（総合表現Ⅱ）」を開講した。総合表現Ⅰは下口美帆・智原江美の2教員が担当し、造形表現と身体表現を連携させた活動をテーマとして取り上げた。総合表現Ⅱは田中慈子・鍋島恵美の2教員が音楽表現と言葉の表現を連携させた活動をテーマとして取り上げた。これらの科目での取り組みについては、「保育者養成における領域『表現』へのクロスカリキュラム導入に関する検討」（日本保育学会第70回大会、於：川崎医療大学）においてポスター発表を行った。

引用文献

三省堂（2006）大辞林第三版

一般社団法人 全国保育士養成協議会（2013）平成24年度専門委員会課題研究報告書「保育者の専門性についての調査」－養成課程から現場へとつながる保育者の専門性の育ちのプロセスと専門性向上のための取り組み－

